論　文

「生活」の焦点化――『暮しの手帖増刊 山のあなたの空とおく』の生活記述

西　川　和　樹

Ⅰ．はじめに

一九四八年九月に創刊された『暮しの手帖』には、はじめ「美しい」の文字が冠され、一九五四年十二月刊行の第二十六号まで『美しい暮しの手帖』であった[1]。「美しい」が付けられた理由については諸説あるが、そこにはこの雑誌の編集を担った花森安治の言葉の政治がある。すなわち、戦前から使い古されてきた「生活」という語を使うのではなく、それまで陰鬱なイメージを与えることもあった「暮し」という語を選び取り、そこに「美しい」を加えることによって、人々の日常に新しい領域をつくりだそうとした、「生活」あるいは「暮し」という語が指し示すものをめぐる言葉の政治である[2]。創刊より数年続いた『美しい暮しの手帖』の時代は、現在も広く支持を受ける『暮しの手帖』黎明期の時代であり、本稿が考察の対象とするのはこの時代の、すなわち終戦の年から一九五〇年代中頃までの時代の、「生活」や「暮し」にかかわる言葉の状況である。

花森にとって、戦後の焼け跡を象徴する風景は露店に並べられたフライパンであった。「僕らにとって八月一五日とは何であったか」という談話で語られる戦後の心象風景は、彼の戦後の活動の契機となったものである。戦中は大政翼賛会宣伝部において戦時スローガン普及の仕事を担い、やがて敗戦を迎えた花森は、フライパンが山積みにされた風景に出会う。

> フライパンがこんなにあるというのは、実に心豊かなことでした。そうして、ぼくは、ここだ、ここじゃないかと思ったんです。台所だ。台所をとにかく北向きからいちばん日の当たるところへ置いたらどうだろう。そこはなんといっても一家の中心で、生活の中心だというようなことがだんだんぼくの中でハッキリしてきて、つまり暮しというものがいちばん大事だ、これをほんとうに、理屈でなくて、腹の底までわかりあおうじゃないか[3]

いささか美化された感のある風景であるが、ここで注目すべきなのは、戦時体制を疑うことなく支えた花森が、その反省をもとに戦後の活動を開始しようとするなかで「台所」、「生活」、「暮し」という領域を見出したことである。加えて重要なのは、こうして見出された「生活」や「暮し」という領域が、「理屈でなくて」理解されるもの、つまり、言葉の領域を超えたもとして設定されているということである。これは、権力の強制によって容易に変えられてしまう「理屈」の領域とは別の場から権力に対抗しようとする花森の意図的な戦略であった[4]。

「理屈」を意図的に手放すことによって、「暮し」を権力への対抗軸としたという花森の説明はしかしながら、自身の戦後の活動を適切に評価しているとは言い難い。上の談話は活動の晩年を迎えた一九七五年に発表されたものであり、花森はその頃、自身も従軍を経験したアジア・太平洋戦争を振り返る発言を積極的に行っていた。事後的に、「生活」や「暮し」と呼ばれる領域は、理屈を超えたものとして国家や資本への対抗軸となり得るのかもしれない。けれど「生活」や「暮し」の領域が立ち上がる瞬間には――何をいかなる方法で語れば、それが「生活」とみなされるのかという問いをめぐる――言葉の政治がある。『暮しの手帖』はそうした政治の遂行の一つの軌跡である。こうした考察を花森のライフヒストリーのなかに引き入れ、言葉によって翼賛体制の一端を担った花森は、戦後の活動においても言葉の持つ力を否定しきれなかったとして、彼の活動の新たな側面を引き出すことも可能だろう。こうした視座を念頭に置きながらも本稿が主題とするのは、「生活」や「暮し」がどのような言葉遣いによって語られ、それは「戦後日本」という時空間において、いかなる意味を持つのかという問いである。

本稿は、「暮し」は理屈でないとする花森の言葉に疑義を挟み込み、「生活」や「暮し」の領域を含みこみながら立ち上がった言葉を考察する。本稿の近景に結ばれるのは『山のあなたの空とおく　主婦の綴り方』（以下、『山のあなたの空とおく』と記載）における生活の記述である。一九五二年に『暮しの手帖』の増刊号として刊行された同書は、一般の女性による生活記述が集められたものであるが、これまで同書は『暮しの手帖』を考察する文脈においても、あるいは同時代に展開した生活記録運動の文脈においても考察の対象とされることはなかった。本稿は同時代の生活記録運動に重ね合わせながら『山のあなたの空とおく』を読み解くことで、自身の生活を綴る文体において何が抱え込まれることになったのかを考察する。さらに本稿が遠景として結ぶものは、「生活」の領域が焦点化したこの時代の風景である。一方で花森が「暮し」を見出し、他方で草の根的な生活記録運動が広がったこの時代、農村部では生活改善運動が、企業では新生活運動が取り組まれた。上からの運動も下からの運動も官民問わず「生活」が活動の場であった。新生活運動の考察のなかで大門正克は「敗戦後から一九五〇年代に

かけての時代は、生活がもっともひろく議論され、政策や運動でも生活への取り組みがみられた時代だった」と指摘する[5]。あるいは鹿野政直は『暮しの手帖』と生活記録運動の両者を取り上げて、「暮らしの復権」という語を用いてこの時代を特徴づける[6]。本稿と同様の考察を共有するこうした指摘においても、しかしながら、「生活」が焦点化した時代背景のなかで生活を記す活動が広く展開したという点に着目し、生活記述の文体を読み解くという視座は、未だ深く問われないまま考察の余地を残している。本稿はこの問いを引き受けるものであり、その結節点となるのは花森である。

Ⅱ.「生活」の焦点化

農林省生活改善課の初代課長として戦後の生活改善運動に携わった山本松代は、生活改善普及事業という名称のもとに始められたこの取り組みについて「私達は欧米人にくらべて生活そのものを余り大切に考えてはいない」として次のように述べる[7]。「客間ばかり大切にして居間はうすぐらい片すみのそまつなものであったり客間や玄関は大きく立派なものでありながら、台所は寒くてきたない設備もないものであったりと言う形式主義的な住まい方も、毎日の生活を少しも大切にしていないからでありましょう[8]」。同様のことをこれと少し異なる語り口で記したものに、次の一文がある。「朝から晩まで、そこに住んで暮している人間は、日当たりのわるい、汚ない、せまい部屋にモゾモゾしていて、他人にみせる座敷や玄関にはヤタラと金をかける、そういうのが、ボクらの建てる家だ[9]」。これを記したのは、山本ではなく、花森安治である。戦後、人びとの生活について述べた両者の見解は奇妙なほど一致している。

この二人の一致は奇妙なものである。山本は農林省生活改善課という国家の機関から農村部の生活改善運動に携わった。生活改善普及事業は、戦後の農業改革を進める占領軍の要請によって生まれたもので、各地に派遣された生活改良普及員がかまど改良運動などを行った。一方で先に述べたように、花森は権力への対抗軸として「暮し」の場を見出した人物である。「暮し」から権力に抗するという思想を『暮しの手帖』において結実させ、「民主主義の＜民＞は庶民の民だ／ぼくらの暮しをなによりも第一にするということだ／ぼくらの暮しと企業の利益とがぶつかったら企業を倒すということだ／ぼくらの暮しと政府の考え方がぶつかったら政府を倒すということだ」と後に宣言した花森の言葉が、同時代に国家の側から生活改善運動に携わった山本の言葉と重なってしまう[10]。この奇妙な一致は、この時代「生活」の領域が焦点化したことを示す一つの証言である。

戦後、農林省が主導した生活改善普及事業は、生活における理念的、道徳的な

規範を広めることを目標としていたというよりはむしろ、その具体的な活動課題、すなわち一家の台所の改善、共同作業への試み、儀礼の簡略化などの課題が取り組まれながら展開した運動であった。この活動を担ったのは家政学や栄養学の専門的な知識を持ち、資格試験を経て地域へと配置された生活改良普及員であった。普及員は農村部の生活改善に取り組む過程で地域の主婦の組織化を行い、家族関係に関わる旧式の価値観のために外出する機会の乏しかった主婦たちに外出する口実を与えた。このように草の根的な組織化が進められた一方で、この事業は農林省の生活改善課という制度的な支えによって条件づけられたものであった。生活改善課は占領期にGHQが主導した農村改革の流れの中で設置されたものであり、農業技術の改良と生活の合理化を両輪にして農村の発展が目指された。戦後の生活改善普及事業は国家の農業政策の枠組みの中にあり、さらにその背景には占領軍による統治の問題も浮かび上がる[11]。

農林省による取り組みとは別に、戦後、日本政府によっても「生活」の語は重要な意味を与えられた。新日本建設国民運動を提唱した片山哲内閣は、新体制における価値観の普及を「新生活運動の一環として取り組むこと」を掲げた[12]。鳩山一郎内閣は一九五五年に新生活運動協会を設立した。国民生活の安定や民主政治の推進、長期防衛計画を訴える鳩山内閣の取り組みの一つとして設立されたこの協会は、活動課題として諸々の生活改善のほかに、「経済の独立」のための国産品愛用、「民族の独立」のための民主主義精神の体得を挙げた。その主な活動は、関連団体との会合や研修会の実施、講師派遣、優良地区の表彰、共済事業の推進であった。新生活運動協会は、同時代の生活運動に承認や支持を与えることによって、何が生活運動であるかの定義づけに関わっていた。

興味深いことにこうした官側の取り組みとは異なるところで、時期を同じくして複数の企業によって大規模な「新生活運動」が取り組まれた。企業における新生活運動は一九五三年に始まった日本鋼管のものを皮切りに、以降、東芝電気、三井鉱山、日本国有鉄道など多数の従業員を有する大企業に広がった。主な活動の内容は受胎調節のための知識を普及する「家族計画」の推進や合理的な生活を行うための啓発活動であり、従業員の妻による社会的活動の場となった。重田園江は企業における新生活運動について「国家・企業・地域・家族・個人のだれにとっても損のない、プラスサムゲームにみえる」と述べる[13]。家族計画を軸とした新生活運動は、戦後の人口膨張に悩む国家、家族手当てなど従業員の厚生費用の削減を目論む企業、ゆとりある生活を求める個人、それぞれの思惑が一致する結節点であった。こうしたプラスサムゲームにあっても、例えば女性にとって家族計画は、自己の生殖の領域に他者の介入を許すことを意味し、生活の領域で展開する運動は常に両義的な意味を持ちながら展開した。こうした両義性に加えて、

新生活運動が人びとの複雑な関係性を作り出したことも重要である。企業によって主導された新生活運動は、やがては国家の承認を得て、多数の従業員を巻き込んだ。この運動によって作り出された人々の関係性は、保革対立や労使対立といった、この時代を特徴づける既存の対立軸によっては捉えることのできない複雑なものであった。

さらに出版や学術の領域においても「生活」や「暮し」が重要な語句として見出された。主婦の四大雑誌に数えられる『主婦と生活』と『婦人生活』の創刊はそれぞれ一九四六年と四七年であり、『暮しの手帖』の創刊は一九四八年である。『暮しの手帖』を契機として、「暮し」を書名に持つ著書の出版が広がった[14]。後述するように、同時代には生活記録運動が広く展開した。この頃今和次郎は、それまで経済学の用語のなかに閉じ込められ、生産活動を下支えするための領域として捉えられていた「生活」を、総合的な視野から捉え直し、娯楽、休養、労働の相互の関係を「科学し、哲学し、それによって統括づけられるように物質生活面である衣食住などの姿を追求し配列づけていくことで輪郭づけられるような、新しい生活学」を着想した[15]。「何もかもが皆、生活改善だったのである」とは農村部における生活改善運動を称して田中宣一が述べたものである[16]。本稿の考察に重ね合わせれば、生活改善運動にとどまらず、この時代何もかもがみな「生活」だったのである。この時代生活を冠した運動のなかで実に多様な活動課題が取り組まれた。だとするならば同時代的に広がった生活を記述するという行為は、「生活」を冠しながら何を語っていたのだろうか。本稿はこれより、生活を語る言葉の領域に着目して考察を進めていく。

Ⅲ．生活を記すということ――『暮しの手帖』と生活記録運動

生活記録は、戦前の生活綴り方教育の流れを受け継ぎ、『やまびこ学校』の出版を契機として、主婦や労働者などを巻き込みながら一九五〇年代初頭より広範な運動として展開した[17]。なかでも一九五二年に岐阜県中津川市で開かれた第一回作文教育全国協議会は、「子どものための生活綴り方運動と大人のための生活記録との歴史的な出会いの地」であり、全国から教育者や研究者が集った[18]。この集いで『やまびこ学校』の無着成恭や四日市で「生活を記録する会」の活動を行っていた澤井余志郎らと出会った鶴見和子は、東京で主婦や労働者に呼びかけ「生活をつづる会」を結成し、その成果を『エンピツをにぎる主婦』（毎日新聞社、一九五四年）、『おかあさんと生活綴り方』（百合出版、一九五七年）などにまとめた。鶴見はこうした活動を通して「共通の生活実感をばいかいとして、そこに起こる共通のもんだいをつきつめて話しあし、調べあう」生活記録の方法に可能

性を見出していた[19]。興味深いことに、これらの著作が出版された同じ時期に鶴見は『暮しの手帖』の花森と対談を行っている[20]。「らしさ排撃論」と題された『婦人公論』（一九五六年三月号）におけるこの対談で両者は「衣食住の細々とした具体的な生活のなかに思想は育っていく」という点で同意している[21]。台所の活動や避妊技術の普及など、戦後の新生活運動における活動は具体性を帯びながら展開したのと同様に、「生活」を軸として言葉を紡いだ鶴見や花森にとっても具体性が重要な意味を持っていた。

しかしながら、こうした両者の近しい関係性にもかかわらず、生活記録運動と『暮しの手帖』はこれまで別々の枠組みのなかで論じられてきた。鶴見が生活記録の活動の特色について「自己をふくむ集団」あるいは、「私たちは、一つの試みとして、特定の個人および個人の体験に密着した生活つづり方から、集団的な作品に転化していくことを考えています」と述べるように[22]、生活記録運動はその集団性、つまりそれまで鉛筆をにぎることのなかった人びとが、話し合いを重ねながら創作を進めたという事実に焦点が当てられ、主に戦後のサークル運動を論じる中で記述されてきた[23]。こうした集団性への着目は、鶴見が主導した「生活をつづる会」を一例として、同時代に日本の各地で無数に広がった人びとのサークル活動を考察するための包括的な視野を形成してきた一方で、人びとの投稿が集められた『暮しの手帖』の生活の記述を考察の対象外としてしまう。一方『暮しの手帖』もこれまで生活記録の文脈のなかで考察されることはなかった。『暮しの手帖』は創刊時より、著名な作家による随筆にまじって、一般の人々による投稿の掲載が目立つ雑誌であったが、同誌は主として、戦後の出版界において特異な軌跡をたどったこの雑誌をジャーナリズムの観点から論じるもの、あるいは編集者花森安治の伝記的事実を支えるものとして読み解かれてきた[24]。このようにそれぞれ別の文脈において論じられてきた両者であるが、人びとの日常の記述から構成される両者は、「生活」が焦点化したこの時代の状況を共有するものとして読み解くことができる。

戦後、言葉の領域において「生活」が焦点化するのは、戦時体制の崩壊を経て起こった言葉の秩序の変容のためである。戦後、人びとが経験することになった既存の言葉の秩序の変容は文学者によっても明確に捉えられている。「半年のうちに世相は変った」とは『堕落論』（一九四六年）の有名な冒頭であるが、この一文は次へと続く。「醜の御楯といでたつ我は。大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」。敗戦を経た社会の変化について、『堕落論』を記した坂口安吾が第一に記したのは、「醜の御楯といでたつ我は」という言い回しを、一瞬のうちに古いものとした言葉の秩序の変化である。あるいは石川淳の『焼け跡のイエス』（一九四六年）では、戦時体制の崩壊によって解放され、さらに戦後の食糧難を背景に増大

した人々の欲望が、闇市という無法のユートピアを駆動させる原動力になることが記述されている。そこで飛び交う食べ物を求める言葉は、この時代の人々の発する言葉が「生活」と密着していたことを示唆している[25]。これらの文学作品に端的に示される言葉の変化は、敗戦の一九四五年から一九五〇年代前半にかけての時代の特色の一つである。この時代、生活記録、ルポルタージュ、ドキュメンタリーなど様々なジャンルが展開した[26]。その根底にあるのは、既存の言葉が崩壊するなかで、目の前に起こる出来事を実感し得る言葉で記録したいという、新しい言語への希求である。

言葉の秩序の転換をこれとは異なる角度から考察したものに鶴見俊輔の論考「言葉のお守り的使用法」がある。戦後間もない一九四六年に書かれたこの論考は既存の言葉の崩壊を背景にして書かれたものであり、それ自体で戦後の新しい言葉の秩序の生成へと向かう遂行的な意味を持った[27]。言葉のお守り的使用法とは、「正統と認められている価値体系を代表する言葉を特に自分の社会的・政治的立場をまもるために、自分のうえにかぶせたり、自分のする仕事の上にかぶせたりすること」である[28]。戦時には「翼賛」「皇国」「八紘一宇」などの言葉がお守り言葉として使用され、こうしたお守り言葉を用いてさえいれば、それが指し示す内容が曖昧であっても、その言葉の使用者の言表が正しいとされる状況が作りだされた。鶴見が指摘するように、戦争が終るとこれらの言葉の多くがその効力を失い、代わりに「民主」「自由」「デモクラシー」などアメリカに端を発する言葉がお守り言葉として用いられるようになった。本稿の視座から補足するならば、「生活」、「暮し」もまたこの時代のお守り言葉であった。

本稿において重要なのは、お守り言葉をめぐって行われる言葉の政治である。ここまでみてきたように戦後いたるところで「生活」の場が見出され、そこに複雑な人びとの配置が作り出された。「生活」という言葉は体制を支える人びとによって用いられた一方で、同じ言葉がそれに抗しようとする人びとによって用いられた。鶴見の論考は主に権力の側の言葉の使用法を論じたものであるが、対抗運動の視座からお守り言葉を考察した場合、鶴見は「人々が毎日つかいなれていて、意味を自分の経験に結びつけることのできるわずかの単語をえらび、これらをつかうことでどんなことをも言いあらわし、どんなむずかしい文章の内容もそれらにおきかえて理解できるような体系をつくることである」と述べている[29]。そうだとすれば『暮しの手帖』や生活記録運動における記述は、「毎日つかいなれて」いる言葉によって自身の経験を記すことで、「生活」をめぐる言葉の政治を遂行していることになる。日常の些細な出来事を記す文体は時に視野の広がりを欠いたものに聞こえるかもしれない。しかしながら、使い慣れた言葉によって日常を記す行為はそれ自体、他者が自身の生活を定義しようとすることに抗する批判的

な潜勢力を持つのである。

日常の言葉遣いが持つ潜勢力を生活記録運動の記述に関わらせて考察してみよう。西川祐子は、生活記録運動にかかわる調査のなかで「言葉に飢えている時代」という言葉に出会う[30]。これは生活記録運動の関係者が集った中津川の集会を知る人物が語った言葉である。その当時を形容する「言葉に飢えている時代」という言葉に反応して西川は次のように記す。

> これは戦争直後に顕著であった、中身のある言葉、指示物のある言葉に対する欲求がまだ絶えないでいた、ということだったのではないか。八紘一宇、鬼畜米英など、敗戦当時に国民学校二年生であったわたしもおぼろに記憶する四字漢語の多い戦争中の標語は、大げさで断言的口調の半面、言葉の指示物が曖昧模糊としていた[31]。

ここでは戦時の出来事が言葉との関係によって捉え返され、言葉とその指示物の曖昧な関係によって生じた、食糧の窮乏による身体的な飢餓感とは異なる、言葉への飢餓感が語られている。生活を記すことの意味が顕在化するのは、こうした文脈においてである。すなわち自身の日常を記す手の動きは「指示物のある言葉」を求める身振りであり、言葉とその指示物のより具体的な関係を探求する行為である。少し先取りして述べるならば、『山のあなたの空とおく』においてもまた、身体の飢餓感ともに、言葉への飢餓感が刻まれており、そこには本を手にすることへの欲求が印象的に記されている。これより生活記述の文体に着目しながら考察を進めていく。

Ⅳ．生活の記述を読む――『山びこ学校』・『エンピツをにぎる主婦』

『暮しの手帖』の第一四号（一九五一年十二月）には、山元中学校生徒作品として「炭焼き」という題の文章と版画が色刷りで掲載された。数名の生徒による版画と文章は七ページにわたって掲載され、山から木を切りだし、かまどで焼いて炭にして、それらを売るまでの一連の様子が描かれている[32]。この山元中学校の生徒たちは、無着成恭によって編まれ、戦後の生活記録運動の発端ともなったことで知られる文集『やまびこ学校』に生活綴り方を寄せた生徒たちであり、『暮しの手帖』の版画の掲載は、同年三月に『やまびこ学校』が出版されてから間もない頃のことであった[33]。

一九五一年に出版された『山びこ学校』は、戦後の言葉の崩壊感を背景として、

それまで例をみないほどの人々が生活の記述に取り組むことになる潮流を作り上げる契機となった[34]。こうしたことから同書は「国民文学」の可能性を示唆するものとして評価され、これを契機として展開された生活記録の運動については、それが主に女性によって担われたものであったがゆえに、鹿野政直が述べるように「知識人ではないことと女性であることによって「思想」から二重に疎外されていた人びとを、まさにその位置に置かれているがゆえにそのまま、新しいタイプの思想主体へ転嫁しようとの発想にもとづく運動であった」とする評価を生み出した[35]。こうした見解はこの時代の生活記述が持つ可能性を確かに捉えている。しかしながら本稿が着目するのは、生活の記述において立ち上がる主体というよりはむしろ、自身の生活という具体性を記すなかで抱え込まれる複数の視線である。

『山びこ学校』の記述に通底するものは、貧困の記述である。「僕の家は貧乏で、山元村のなかでもいちばんぐらい貧乏です」という記述で始まる江口江一の「母の死とその後」は[36]、生活記録を読む多くの人々によって注目され、自身の問題を言語化してその改善の方向を探る記述の代表的な例として受けとめられた。母と父を亡くし、兄弟がばらばらになって親戚に預けられることになる江口は、自身の状況を捉えるために算術的な考察を用いて記述を進める。「毎日必要なきまった金高だけを計算してみると、一か月ざっと二千円はかかるようです[37]」。こうした算術的な思考は、生活記録運動の理論的な方法と一致するものであった。戦前から続く生活綴り方運動の理論的指導者であった国分一太郎は『やまびこ学校』の文体について、「戦後教育にゆるされた科学的な思考にもとづいて、戦前の生活綴方にはみられなかった「事実にもとづいた高度な論理的思考」の萌芽を示す、知性と感性のまじり合った一種独特の文体を新しく生み出している」とする[38]。ここで述べられる「科学的思考」とは算術の導入であり、それによって自身の生活を描き直すことが「生活」を記すことだとされた。「今、私たちの家ではお金がなくて困っています」という書き出しで始まる「学校はどのくらい金がかかるものか」では、自分たちの小遣い帳をもとにして、生徒が学校へ支払う一人当たりの平均支出が割り出される[39]。この文章では経済的に困窮する生徒が学校へ通えない状況が、村の予算から割り当てられる教育費の問題として捉え直される筋立てになっている。ここでも記述の中心は算術的な分析であり「山元の二倍の村予算を持つ本沢では、学校予算が十四.四％で。ざっと山元よりも一％も多いのです」という訴えとともに、この文章には様々な表や統計が付けられる[40]。「分析から出発して、普遍に向わせる」という生活記録で目指された「科学的」な方法は[41]、生活記述に経済的な視座をもたらし、生活の合理化への道を切り開くことになる。こうした方向性は同時代の生活運動が目指したものと重なるものであ

る。しかしながら算術的思考は時として、そこに書かれた内容を動かしがたい現実として定位してしまう効果を持つ。「母の死とその後」を記した江口は、算術を用いて自身の生活を顧みたあと、「貧乏なのは、お母さんの働きがなかったのではなくて、畑三段歩というところに原因があるのではないかと思えてくるのです。三段歩ばかりの畑では、五人家族が生きてゆくにはどうにもならなかったのではないでしょうか」という認識に至る[42]。佐藤泉が述べるとおり、彼は「知ったからと言ってどうすることもできず、それなら知らないでいた方がましなたぐいの事実」に気が付いてしまうのだ[43]。

一方でそうした算術的な思考とは別に、動かし難い現実を未決のものとして捉え返す記述も存在する。ひとまずこうした記述は、生活記述に現れる「空想」や「夢」にかかわるものであると言えるだろう。「雑誌はなぜつぶれるか」という文章は、学校で購入する雑誌をめぐって行った討論の様子が書かれたものである[44]。購入を決めていたいくつもの雑誌が「つぶれて出なくなった」ことから、討論はなぜ雑誌がつぶれるのかという問題に向かう。雑誌が売れないのは、買う側に「銭がなくなったから」だというとになり、その場にいた「先生」によって、なぜ「みんなの家では、銭がなくなりつつあるのか」と問いかけられる。「分析から出発して、普遍に向わせる」という生活記述の道筋が、「先生」の誘導によってここでもまた描かれている。「先生」は、農家の村に銭がない状況を「インフレーションとか、農業恐慌」という言葉を用いて説明しようとする。しかし興味深いことに、この文章では「先生」が誘導した分析的な道筋を離れて、もっと雑誌を読みたいという自身の欲望を記す方向へ向かう。「いい雑誌をつぶさないようにするには、いい雑誌を多く買って読むことだ」と結論付けられるこの文章には、動かし難い現実を発見しながらも「いい雑誌」を手もとへ引き寄せたいとする欲望が、分析を離れたところで展開している。

こうした身振りは、『山びこ学校』の「あとがき」で無着が記した、「空想家」が語りだす事態と共通のものである。そこでは学級の話し合いの風景が記され、村の農業について話し合うなかで一人の「空想家」が登場する。彼は村の農業の問題を解決するために機械の導入を提案するのである。「そうすると、もうみんなその気になって、まだ見たこともない機械が明日からでも続々動きだすようなさっかくにとらわれてはしゃぎまわるのでした[45]」。機械化によって村の農業の生産性を高めることに強調点が置かれているのではない。重要なのは、まだ見たこともない機械が動き出す展開が語られることである。たしかに「空想家」によるこうした語りは、無着が続けて記すように、「子供たちはすぐに現実にかえり、どういうふうにして機械化するかを話し合い、結局、機械を買う金がないからだめだということになるのでした」という、動かし難い現実の算段によってすぐに

かき消されてしまうものである[46]。しかしながら『やまびこ学校』の生活記述には、現実の算段によって定義される「生活」が記される一方で、未決の可能性へと開かれる「生活」も描かれ、両者がせめぎ合う瞬間が内包されているのである。

生活を記す過程で抱え込まれる複数の視線については、例えば『エンピツをにぎる主婦』など同時代の生活記録運動から生まれた著作の中にもみられる。鶴見和子によって編まれたこの著作は、「いままでものを書くひまも習慣もなかった」労働者や主婦が定期的な会を開いて、そこで批評を重ねながら記した文章がまとめられたものである[47]。ここに寄せられる生活記述においてもまた、算術的な記述は重要な役割を持っており、例えば「二人の総収入、一万五千九百四十七円、家賃三千円、光熱費、水道料七百円、主食千円・・・」と記す中本厚子の場合のように、子どもを産むかどうか迷っている状況が家計の算段によって説明される[48]。

一方で、日々の労働を振り返る中で綴った北上千鶴子の記述は、算術的な思考が職場の労働強化につながり得るものであるということを捉えている。「桃色のヒヤシンス」と題された彼女の文章は、興味深いことに「寒いわねえ、けさは何度くらいかしら」と書き出される[49]。些細ではあるが同僚との数字のやり取りによって描き出されるのは冬の労働の風景である。一方で彼女が数字を用いて記すのは、職場における合理化推進の過程である。「職布課の場合には、合理化前の五月には、二百十四人で三万五千三百メートルが、合理化後の七月には、百七十五人で四万千七百メートルになり」、また「仕上課」においても、合理化後はより少ない人数でより多く生産していることになる[50]。この記述では算術的な思考が、自身の生活を捉えるためというよりはむしろ、合理化を進める企業の論理を記すために用いられている。生活改善への道を開く算術的な思考は、企業によって流用され、時として自身の日常を侵食する効果を持ってしまう。「機械の一部分のように働きつづけながらも、やっぱりロマンチックな詩や、美しい歌に思いをはせる私たちなのです」と記す彼女の文体は[51]、空想の領域によって別の現実を引き寄せようとする身振りであり、労働の合理化を求める企業の論理に対する抗いの所作となるのである。

Ⅴ.『山のあなたの空とおく』の生活記述

一九五二年は生活記録運動にとって記念碑的な年であった。この年、中津川で作文教育全国協議会が開催され、前年に出版された『やまびこ学校』が今井正によって早くも映画化された。同年、『山のあなたの空とおく』が『暮しの手帖』増刊号として出版された。この頃『暮しの手帖』誌は、それまで一般から募った原稿をまとめて『すまいの手帖』（一九五〇年）、『思いつき工夫の手帖』（一九五一

年)、『自分で作れる家具』(一九五二年)など別冊や増刊号を刊行した。これらは貧しくても工夫を重ねて暮しを豊かにするという『暮しの手帖』の思想を実践するための読者の投稿をまとめたものである。一方で『山のあなたの空とおく』は、「主婦の綴り方」という副題にあるとおり、主婦による生活記述を掲載しており、実用的な記事が中心の他の別冊とは異なったものである[52]。同誌のあとがきには「名もないひとたちの原稿ばかりで、一冊の雑誌をつくる、という試みは、さきの増刊「思いつき工夫の手帖」でいたしましたが、こんどのように、女のひとの文章ばかりを集めた雑誌は、いまの世の中にも、これがはじめてではないかと存じます」とある[53]。

『暮しの手帖』には創刊号から一九五三年の第二〇号まで「女の日記」という題で、毎号一般読者による投稿の随筆が掲載されていた。『山のあなたの空とおく』はこの「女の日記」のために投稿された原稿を集めたものである。同誌には一般から集めた七二本の随筆が掲載された。それぞれの冒頭には、題名と筆者の名前が記され、それぞれの筆者に職業を示す肩書が記されている。投稿者のおよそ八割は主婦によって占められ、他の肩書として教員や学生、会社員からの投稿が複数みられ、無職と記されるものも三件ある。その他には、女工や看護婦、女給、薬剤師、新聞記者、タイピスト、メイドなどの職業が記されている。随筆の分量は、長いものから短いものまで統一されておらず、文章の終わりには、投稿者の住所が記されている。投稿者の住所は、東京からのものが最も多く全体の三分の一程度を占め、他には大阪や神奈川、兵庫などの大都市からの投稿も多いが、地方からの投稿もみられる。雑誌の編集者として大橋鎮子をはじめ六名が名を連ねており、表紙、装画として花森の名前がある。表紙には花森のサインの入った、電灯と思われる洋風の家具が描かれている。表紙を開いた頁には、『暮しの手帖』誌と同様の構図で短い散文が寄せられている[54]。

『山のあなたの空とおく』の記述も同時代の生活の記述と同様に、自分の豊かではない生活を記し、さらにそこに算術的な思考を用いて記述を進めていく展開がみられる。例えば女工の高木さと子は、「六十円有れば、私の二週間分のお菜代になる」と記し[55]、主婦の井上みどりは「どこかへ行って借金をして、パン券引きかえのお粉の配給を受けて、自分でおうどんを作ろう、そうしたらゆでめんより百匁につき九円四十銭は安くつくからと、考えた」[56]。こうした算術的な生活の記述は、ここに文章を寄せた多くの女性にとって、自身の生活を効率的に維持していくための思考の根拠であった。

一方で高崎靖子の記述には、生活に託される夢と算術的な思考がせめぎ合う様子が現れている。高校を卒業し、現在は無職である彼女は、自分の描いていた未来について回想する。「卒業になるまでは、就職したらといろいろ夢をだいてい

たのだったが、余りにその夢は瞬間的なものにしかすぎなかった[57]」。「貧しい暮しの中にあって、充分に現実を取りいれた夢だったのだが、その夢さえも今は無慙であるのだ[58]」。彼女の夢を消失させたものは、現実として語られる算術的な思考である。「五ヶ年計画で十五万位ためて、のこりは住宅金融公庫から融資してもらい家を建てようというのだ[59]」。しかしこうした算段は「現実」の挿入によってかき消されてしまう。つまり「このような夢もどこ迄本当として実現することやら、すべて砂上楼閣と終わるかもしれないのであるが、就職口のない今としては穴のあいた風船のようにふくらませればしぼみ、ふくらませればしぼんでしまうのだ[60]」。主婦の多田光江も同様に、想像によって膨らませられ、現実に消失してしまう夢を「シャボン玉」という題で書き記している[61]。

動かしがたい現実の状況を記しつつも、それを別のものにしたいとう欲求は、「夢」という題で記した朝倉多美子の文章において現れる。国語が得意だった彼女が、幼い頃夢見たのは小説家やジャーナリストになることだった。彼女は幼い頃の言葉への熱意を次のように回想する。「本が得られない生活からぬけ出して本にありついた私だったから、むしゃぶりついて読んだ」[62]。しかし、そうした夢も現実によって敗れ、算術的な思考によって消失させられる。彼女が今求めているのは次のようなことである。「八時から四時までの勤めで、勤めには交通の便がよく三十分位の所で、家も勤め先も都内であって欲しい。毎月平均五冊位ずつ本を買い、映画は月に一本、母の為に歌舞伎か寄席を一回位見たいし行きたい」[63]。『山のあなたの空とおく』に寄せられる文章において特徴的なのは、現実的な算段と空想がせめぎ合う記述のなかに、多くの場合、本を手にすることへの欲望が挿入されることである。上に引いた高崎の記述においても、「仮に三千円の給金がもらえるとしたら」とする記述において「自分のお金が出来たら本屋で立読みなどすることはやめて」、「よろこびと満足とを持って、自分の物として本棚へならべることができるのだ」として、自分が思い描く「生活」のなかで本を読む生活を描いている[64]。

こうした本を読む生活への意志を家事手伝いの香取紀子は次のように表現する。

> お小遣いにと五十円頂いた。欲しいものは沢山あったがこれだけなかったものだと思い、「ホヴァリィ婦人」を買った。それを見せると叔母様は「おこうこたべて本を買うよりお魚買った方が身のためだわ。本なんか、貸し本屋で借りて読めば沢山よ」と云われた。私が本ばかり読むので叔母様から嫌われている事は分かっているのだけどどう思われても構わない。本が読めない生活は考えられないから[65]。

ここでは、算術的な記述が自身の生活に分析的な視点を加えるために用いられる多くの生活の記述とは異なり、算術的な思考によって描かれる思考とは別のところに「生活」があるということが端的に語られている。戦後の時代の言葉への飢餓感を背景として、『山のあなたの空とおく』に寄せられた多くの文章には、言葉への欲求が切実に記される。決して裕福ではない生活を記す店員の木村香にとって、本は物質的な価値を持つもので、「おまじないみたいに、本をとり出してばらばらとさがしてひろげ」ると、「出て来た頁は立派な呪文で、私を別な世界へ運んでくれ」る[66]。あるいは、主婦の西岡文子が記す「常人の最低生活をやっと支える程度の給料で、本を買ったり山へ行ったりしたから、給料日が近付く頃にはガスに入れる一銭がなくて、寒い時分お湯の代りに水を飲んでいた事もよくあった」という記述にも同様に、身体的な欲求を犠牲にしてまで求められる本を読む生活への希求が述べられている[67]。こうした生活は「貧しいけれど」、「実に自由」なものであったと回想されるように[68]、「本が読めない生活は考えられない」という記述のうちに語られる「生活」は、ひとまず自身の日常のなかで自由を求めたものとして理解できる。一方でこうした記述は、算術的に定義される「生活」への抗いであり、それ自体で「何が生活であるか」という定義を押し広げる遂行性を持つものであった。『山のあなたの空とおく』に記される生活の記述の文体は、「生活」を定義することにかかわる言葉の政治を担っていたのである。

Ⅵ．おわりに――手もとへ寄せられる視線

ここまでみてきたとおり、戦後の日本社会は人びとの活動のなかで「生活」が焦点化された時代であり、体制の変容による言葉の崩壊感を背景にして、人びとが使い慣れている言葉によって自身の経験や周囲の問題を記述することが重要な意味を持つ時代であった。生活記録運動や『暮しの手帖』誌における生活記述の文体は、これら生活の記述が潜在的な力を持ったことの一つの証左であった。その記述には算術的な思考により自身の生活を捉えようとする視線の他に、空想や夢を語る文体に自身の生活を別のものにしようとする視線が含まれていた。

重要なのは「現実」に「空想」を対置させて、その二項対立において「空想」の力を言祝ぐことではない。問われているのは、数字によって語られる現実とは異なる種類の現実が描かれているということであり、空想や夢といった領域を援用しながら「現実」を自身の手もとに引き寄せるそれぞれの記述があるということである。

こうした事態は何を意味しているのだろうか。重要なのは、こうした生活記述の文体は夢や空想を援用しながらも、多くの場合視線は手もとに置かれていると

いうことである。「本が読めない生活は考えられない」と綴った香取は、以下の記述においても、目線を手もとに寄せながら自身の「生活」を記述している。

> 美しい手の人を見る度に荒れゆく私の手を、悲しく眺めるのは私も女であってみれば当たり前のことであろう。手が荒れる、決して悲しんではならない。美しい手の人を羨んではならない。けれど去年迄の自分の美しかった手を思い出さずには居られない。叔父の家に厄介になって来ている私には手や顔の事など考えるのは贅沢と云うものだ[69]。

こうして手もとへ向けられる視線は、算術的な思考や分析的な思考の導入によって遠くを見渡すようにして書かれる視線とは異なる種類のものである。端的に本を手にすることへの欲求として現れたこうした視線は、何事も自身の立つところから思考を始め、それを使い慣れた言葉で語るという生活の記述を通底する重要な視線である。こうした視線は、「生活」のもとに語られる記述がある具体性を帯びることにも関係しているだろう。手もとに寄せられる視線から生まれる記述の潜在力が、「生活」に介入しようとする権力への対抗軸としていかなる可能性を持っていたのかという問いは重要なものである。この問いについては、この時代の新生活運動など国家や企業によって主導された運動がつくりだした複雑な人々の関係性やそこで語られた言葉を視野に入れながら考察されなければならないだろう。この主題については機会を改めて論じたい。

Endnotes

1　花森安治が描いたことでも知られる初期の『暮しの手帖』の表紙については例えば以下の文献を参照（『暮しの手帖保存版III「花森安治」』（暮しの手帖社，2003））。なお、第二十二号以降は背表紙にのみ「美しい暮しの手帖」と書かれる体裁が取られている。
2　津野海太郎は花森の評伝のなかで、「生活」と「暮し」の語感の違いについて次のように述べる。「いま「暮し」とか「くらし」と書けば、ちょっと都会風で垢ぬけた感じになるが、むかしはちがう。近代日本でlifeの訳語として用いられてきた「生活」の語が、「生活改善」とか「生活設計」とか、どこかバタ臭いインテリ的なひびきをもっていたのに対して、「暮し」という和語は昔ながらの庶民の貧しい日常とむすびつき、そのぶん地味で、どちらかというと暗いイメージのほうがつよかった。」（津野海太郎『花森安治伝　日本の暮しをかえた男』（新潮社，2016），242.
3　花森安治「≪談話≫　僕らにとって八月一五日とは何であったか」『花森安治集　いくさ・台所・まつりごと篇』（LLPブックエンド，2013），218-219.
4　花森は「理屈」の軽薄さについて次のように述べる。「理屈でいくらいっても理屈には必ず反理屈があるわけですよね。そうすると、そこで議論ばっかりしているうちにめんどうくさくなって、それで少しサーベルの音がガチャガチャしてきたり、牢屋の鍵の音がしてきたりすると、めんどうくさい、はい、賛成、賛成になっちゃう」（Ibid，212.）。
5　大門正克編『新生活運動と日本の戦後　敗戦から1970年代』（日本経済評論社，2012），11.
6　鹿野政直『日本の近代思想』（岩波書店，2002），151-153.
7　山本松代（1907-99）は戦前ワシントン州立大学で家政学を学び、戦後より農村部で行われた生活改善運動に携わった。一九四八年農林省農業改良局普及部生活改善課創設にともない初代課長に就任し、その後十七年間その職を務めた。彼女の経歴や思想については以下の文献に詳しい（片倉和人「生活改善普及事業の思想――山本松代とプラグマティズム」田中宣一編『暮らしの革命　戦後農村の生活改善事業と新生活運動』（農文社，2011）。
8　この記述は生活改善普及事業の開始直後から発行されている『普及だより』（第2号，1949年1月15日）、「生活改良普及員の仕事」に掲載されたものである。なお本稿での引用は以下の論文より（市田友子「生活改善普及事業の理念と展開」『農業総合研究』第49巻第2号（1995），16-18.）。
9　花森安治「無茶苦茶の茶」『花森安治　戯文集1』（LLPブックエンド，2011），15.
10　花森安治『一箋五厘の旗』（暮しの手帖社，1971），110.
11　生活改善普及事業と占領統治の問題に関しては、アメリカの家政学者が動員されたという興味深い回想がある。例えば今和次郎は「かつて占領時代に、アメリカの家政学者がきて、わが国の農村で、農民大衆に対して、生活改善を講じたときに、私も列したそのときの場景のことが思い出されるが、まったくそれは、聞き手たちは、見世物でも見るときの気分と表情とであったのである」と述べる（今和次郎「生活改良普及員の登場」『今和次郎集第六巻家政論』）（ドメス出版，1971），471-472.）。
12　大門編，34.
13　重田園江「少子化社会の系譜―昭和30年代の「新生活運動」をめぐって―」『季刊家計経済研究』（2000年夏号），42.
14　堀場清子『女たち創造者たち』（未来社，1986），203-204.
15　今和次郎『生活学　今和次郎集　第五巻』（ドメス出版，1971），17.
16　田中編，303.
17　この時代に広く展開した生活記録運動をまとめたものとして以下を参照。北河賢三「序生活記録運動の概観」『戦後史のなかの生活記録運動　東北農村の青年・女性たち』（岩波書店，2014），1-41.
18　西川祐子「サークル運動再考――鶴見和子文庫から」安田常雄編『シリーズ戦後日本社会

の歴史③　社会を問う人びと』（岩波書店，2012），59.
19　鶴見和子『生活記録運動のなかで』（未来社，1968），18.
20　鶴見和子・花森安治「らしさ排撃論」『婦人公論』（1956年3月），148-153.
21　鶴見・花森，149.
22　鶴見『生活記録運動のなかで』36.
23　例えば一九五〇年代を「記録の時代」と定位した鳥羽耕史は、「サークル運動と生活記録」という枠組みのなかで生活記録を論じる（鳥羽耕史『1950年代「記録」の時代』（河出書房新社，2010），46-76.）。
24　『暮しの手帖』をジャーナリズムの文脈から読み解いたものについては以下の文献を参照（雪野まり「『暮しの手帖』における自立的ジャーナリズムの形成」（博士論文，東京経済大学，2013））。花森の評伝は複数存在するが、代表的なものとして以下を参照（津野海太郎『花森安治伝　日本の暮しを変えた男』（新潮社，2016））。
25　『焼跡のイエス』の冒頭部において、市場に放たれる言葉は次のように記述されている。「蠅がたかっている黒い丸いものは何か。外からちらと見たので何とも知れぬ恰好のものであったが、「さあ、焚きたての、あったかいおむすびだよ。白米のおむすびが一個十円。光ったごはんだよ。」とどなっているのを聞けば、それはにぎりめしにちがいないのだろう」（石川淳「焼跡のイエス」『新潮』（1946年10月），95.）。ここに食べ物を指し示す具体的な言葉遣いが語り手の認識を変容させる過程が描写されている。福岡弘彬は「眼前の光景を「変わる可能性のある現在」として読み替えていく物語、それがこの小説である」と述べる（福岡弘彬「焼跡を読み替える方法――石川淳「焼跡のイエス」とユートピア」『昭和文学研究』（2016年9月），103.）。先取りして述べれば、本稿が着目する生活の記述に抱え込まれるのもここに指摘されているものと同様の「変わる可能性のある現在」である。
26　鳥羽，8-18.
27　本稿で参照するのは、鶴見俊輔「言葉のお守り的使用法について」『ことばと創造』（河出書房，2013）。この論稿は戦中から戦後にかけての言葉の用法について多くの示唆を与えるものであるが、それだけでなく内容の曖昧な言葉が氾濫する状況を「その社会における言葉のよみとり能力がひくいこととときりはなすことができない」と批判的に考察する視座は、再び曖昧な言葉の氾濫する現代的な状況を含みこむものである。
28　Ibid.，132.
29　Ibid.，156.
30　西川裕子「生活綴り方教育と生活記録運動がめざしたもの」杉本星子・西川裕子編『共同研究　戦後の生活記録にまなぶ』（日本図書センター，2009），116.
31　Ibid.，116.
32　『暮しの手帖』14,（1951），45-52.
33　なお同書の新版には、「炭焼き」も収録され、「新版あとがき」には、無着による花森への謝辞が記されている。
34　『やまびこ学校　山形県山元村中学校生徒の生活記録』の初版は一九五一年三月、青銅社から出版されている。本稿で参照するのは無着成恭編『やまびこ学校』（岩波書店，1995）。
35　鹿野，152.
36　無着編，22.
37　Ibid.，33.
38　Ibid.，341.
39　Ibid.，160.
40　Ibid.，170.
41　Ibid.，343.
42　Ibid.,，34.
43　佐藤泉「五〇年代ドキュメンタリー運動――生活を綴る」『昭和文学研究』（2002年3月），

18.
44　無着編，111-115.
45　Ibid.，34.
46　Ibid.，34.
47　生活をつづる会「はじめに」鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』（毎日新聞社，1954）.
48　Ibid.，194.
49　Ibid.，122.
50　Ibid.，125-126.
51　Ibid.，124-125.
52　とはいえ同誌に寄せられた数々の挿話は「実用的な」知識として人びとの暮し方に影響を与えていた。例えば花森の娘である土井藍生は、父花森について記したある文章の中で煙草、マッチ、灰皿の三点を挙げ「煙草を吸うには三つが揃うことが必要だから、今度からは云われなくても三点セットで」と言われた経験について記している（土井藍生「父・花森安治」『花森安治の仕事　デザインする手、編集長の眼』（読売新聞社美術館連絡協議会，2017），15.）。実は全く同じ挿話が『山のあなたの空とおく』にもみられる。同誌に「型にはまる」という文章を寄せた森屋美知代は、煙草を渡したときの夫との会話を「なんだ、煙草だけか。S子なんか、叔父さんが煙草っていうと、ちゃんとマッチも灰皿ももって行くぞ。駄目だなあ、お前は」と記している（『山のあなたの空とおく』52.）。
53　Ibid.，126.
54　『暮しの手帖』誌の表紙をめくると「これは　あなたの手帖です」で始まる花森の散文が掲載されており、この構図は現在まで続く。『山のあなたの空とおく』も同様の構図をとっているが、『暮しの手帖』のものとは別の散文が載せられているため、ここに紹介する。「きのうも　きょうも／さりげなく　事もなげに／日は過ぎ　日は暮れてゆく／けれども／あなたは知っている／そのさりげない暮しのかげに／どれだけの／妻の　娘の　母の／夫なきひとの／怒りと　なやみと　よろこびと／かなしみと　あきらめと／そして　はげしい祈りが／こめられていることか／いま　ここに集められたのは／日日のあけくれに／ちゃぶ台で／職場の机で／チビた鉛筆とザラ紙で綴った／いわば暮しのなかのうたである」。
55　Ibid.，47.
56　Ibid.，62.
57　Ibid.，87.
58　Ibid.，87.
59　Ibid.，87.
60　Ibid.，87.
61　Ibid.，50-51.
62　Ibid.，37.
63　Ibid.，38.
64　Ibid.，87.
65　Ibid.，19.
66　Ibid.，17.
67　Ibid.，23.
68　Ibid.，28.
69　Ibid.，20.

Abstract

Writing life in the age of "life"; reading "*Yama-no-anata-no-sora-toku*"

Kazuki Nishikawa

In this essay, the significance of life record is discussed with a close look at a magazine, *"Yama-no-anata-no-sora-toku" (The Sky above the Mountain),* in order to describe social situation of Japan after the World War II through the early 1950s. The magazine, which was published in 1952, consists of writings by ordinary women, and the significance of this text lies in the fact that it was published in the social context where the realm of "life" (seikatsu) became focused both by ordinary people and those in power, suggesting the social conflict involving such questions as "what is the life" or "who defines it".

After the huge devastation of WWII, Japanese society experienced drastic changes; occupation by GHQ/SCAP, the outbreak of Korean War, economic growth, and the restoration. Some scholars characterize this era as the era of documentation in which people who had scarcely engaged in writing began to write their social situation, leading to the establishment of variety of genres including Seikatsu-kiroku (Life Record movement). As the social background of the focus on "writing", it is suggested that the system of Japanese language itself experienced a drastic change as well; war time regime established normative usage of language with the variety of ideological and empty expressions, whereas after the war such norm disappeared. As hunger and poverty led more people to express what they wanted, the language of new era made the description of "life" critically important.

On the other hand, it has to be pointed out that the period just after the war through early 1950s is the era of "life." Many people began to their work and activity by using the word, "life," as the grass roots movement Life Record movement developed all over the country and lots of books and magazines about "life" published. The government and companies at that time put high emphasis on "life" as well, trying to disperse the ideology of the new nation or importance of efficiency by intruding into the realm of domesticity. Here

appears the conflict among the variety of agencies from people's grass roots movement to the mobilization designed by the nation or companies so as to control the realm of "life".

It is exactly this social situation after the war that the significance of the description of "life" arises. What is at stake is the language to describe "life"; some people introduce arithmetic thinking into their own writing in order to improve their situation of poverty while others try to describe open-ended nature of their life yet to come. Within the life record writing, there is such tension oscillating between dream and reality as various description in *"Yama-no-anata-no-sora-toku"* reads, suggesting the potential power of writing about life in order to resist the normative definition of life.